

伊江御殿家 関係資料

146点

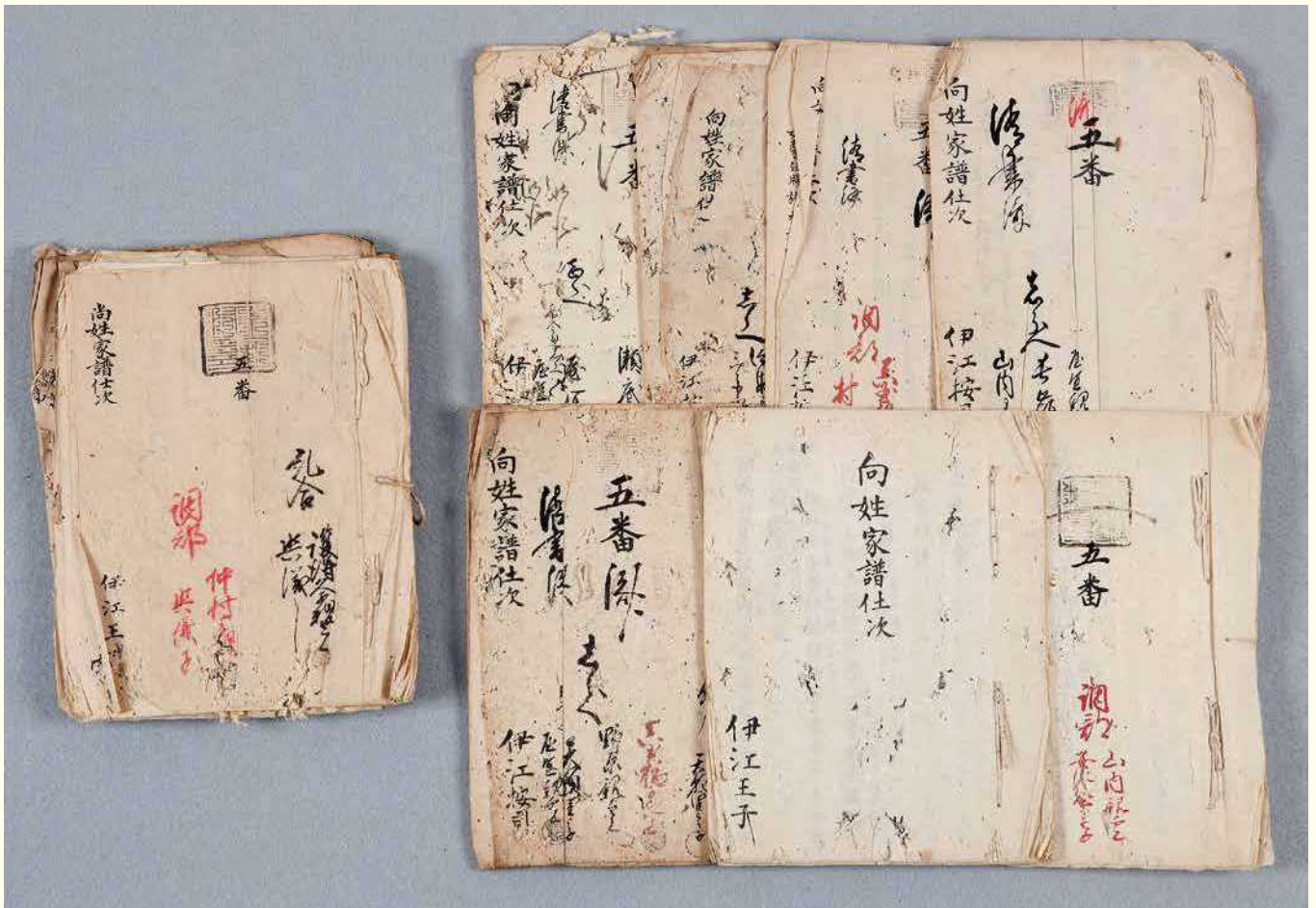


首里土府の
中心にいた家系に残る
文書類なんだね。

伊江家のある人の生まれて
から亡くなるまでの記録も
あるんだ。琉球国時代の
上級士族の一生がみえて
くる貴重な資料が宮まいて
いるんだよ。



古文書からみえてくる上級士族の一生



向姓家譜仕次

伊江家(伊江御殿家)は、第二尚氏四代尚清王の第七王子尚宗賢(伊江朝義:1538~1586年)を初代とする首里の名家で、摂政等を多数輩出しています。琉球処分の時期に、王府最後の摂政として事に当たったのは十一代朝忠(伊江朝直:1818~1896年)でした。

この資料は、伊江家伝来の文書・記録類145点及び書跡1点の計146点です。文書・記録類

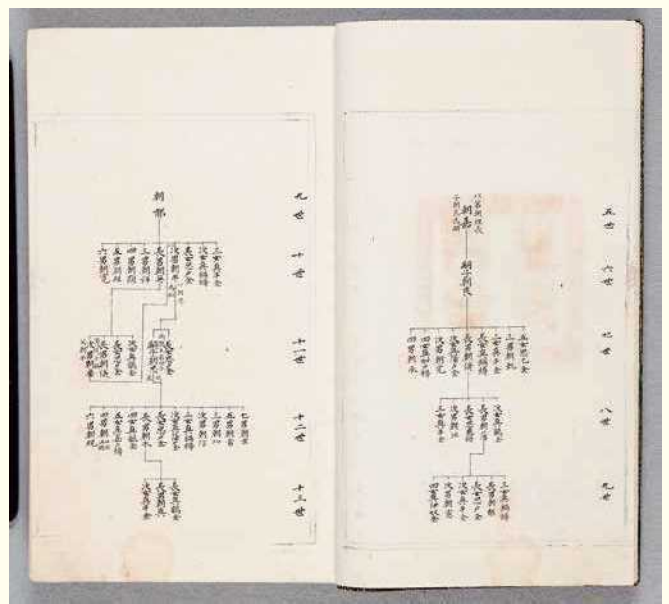
は、家譜類、伊江家の人々の履歴関係からなる記録類と、辞令書、生子証文、言上写等からなる古文書類に分けることができます。これらは琉球国の王族における家譜及び家譜編さんに関わる文書、記録類がまとまって伝存する大変珍しいものです。伊江家の歴史のみならず、琉球国の家制、職制、文化について記されており、政治史、文化史上においても、価値が高いものです。



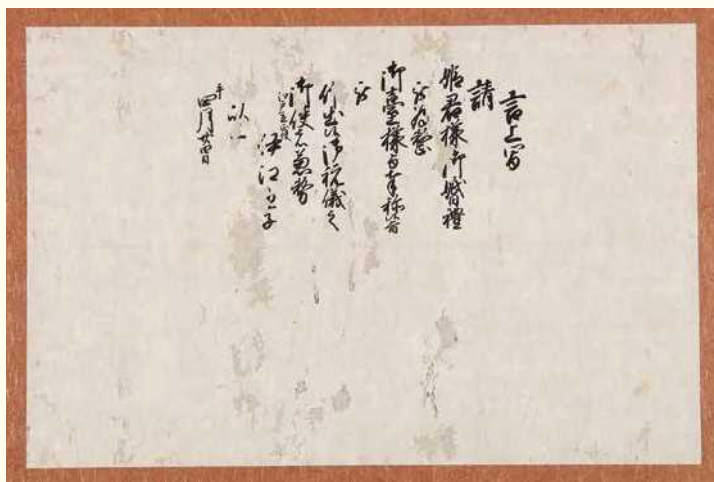
向姓家譜大宗



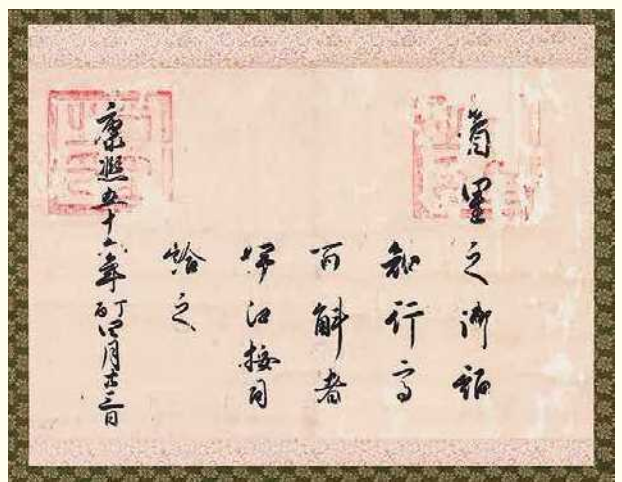
向姓家譜大宗(世系圖と首里の印)



向姓家譜大宗(世系圖)



言上写(御婚礼祝儀の件)



辞令書(康熙五十六年)

(写真提供:那覇市歴史博物館)

や え やま くら もと え し が こ う る い

八重山蔵元絵師画稿類

みや ら あん せん きゅう ぞう

(宮良安宣旧蔵)

90点



人々の様子がリアルに描かれているね。

この画稿類は、戦前に八重山を訪れた鎌倉芳太郎に、持ち主の宮良安宣が託したもので、戦後、鎌倉が石垣市に寄贈したんだ。その縁で、鎌倉芳太郎は、石垣市の名誉市民になったんだよ。



記録された八重山の人々の生活



弥勒の行列

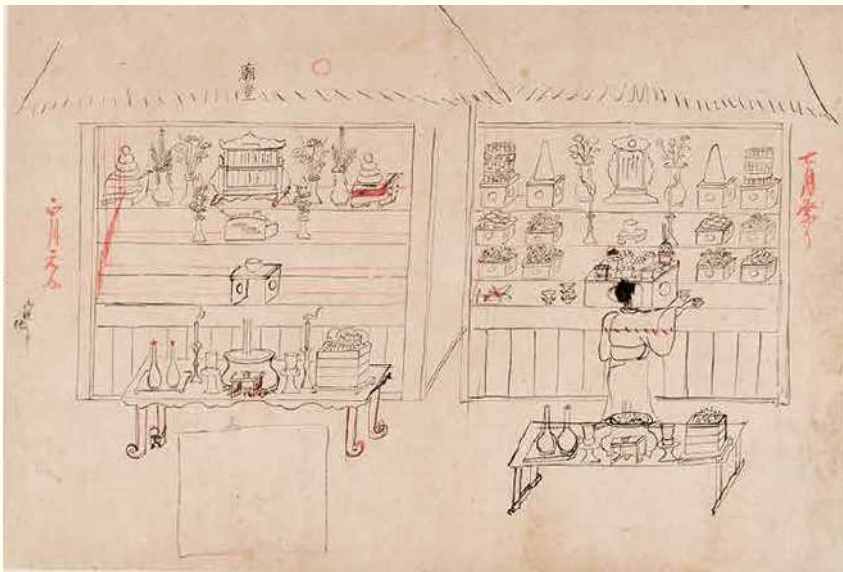
この資料は、琉球国の八重山蔵元の絵師が描いた画稿類をまとめたもので、建造物を除く有形文化財としては八重山地域で初めて国の重要文化財指定を受けました。

蔵元とは、首里王府が離島を統治するための機関で、蔵元絵師は、寺社の絵画や人々の生活を記録した風俗画の制作に加え、漂着船等の記録画や貢納布御絵図帳の作成、さらには地図の作成を行いました。

画稿とは、絵の下書きや練習のために描かれた作品のことを言います。この画稿類は、最後

の蔵元絵師であった宮良安宣(1862~1931年)が持っていたもので、豊年祭等の年中行事を描いた風俗画が最も多く、他に機織り、布晒し、稲刈等の納税に関するもの、漂流民や船等の記録画、花鳥図等があります。これらは王国時代末期に蔵元絵師として活躍した喜友名安信、宮良安宣等により描かれたものです。

19世紀後半の第二尚氏時代から明治時代における八重山の文化や自然を蔵元絵師が幅広く描いた珍しい資料であり、この地域の文化史、琉球絵画史等の研究にとっても重要なものです。



■ 仏壇の飾り



■ 草木の図



■ 男女の図



■ 異人風俗図



■ 弥勒(拡大)

県指定有形文化財(昭60.6.18)

銅鐘残欠

(旧波上宮朝鮮鐘)

1点



胴体が失われて、
竜頭だけが
残っているんだね。

鎌倉芳太郎の写真に戦前の姿
が残っているよ。朝鮮から琉球
へ贈られて波之上宮に架けられ
ていたんだ。当時、琉球と朝鮮
の間で交易があったことを示し
ているんだ。また、鎌倉芳太郎
の写真では、竜頭が針金のような
もので結び付けられている様
子が見えるよ。



沖縄戦で失われた国宝のかけら



竜頭(銅鐘の一部)



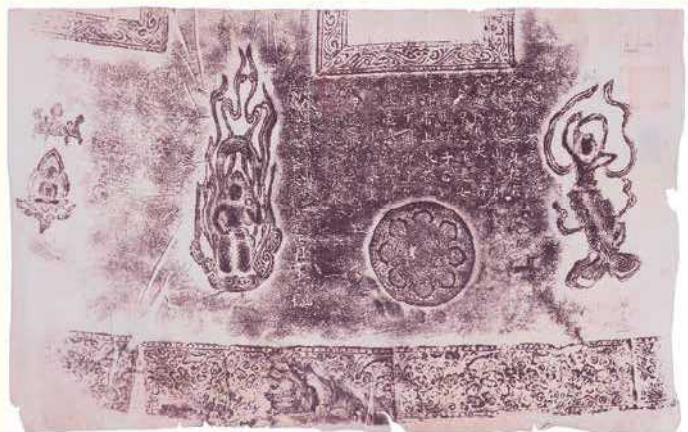
①旧波上宮朝鮮鐘(戦前)

この銅鐘は、現在の韓国の慶尚南道にある寺に掛けられていたもので、鐘銘から956(顯徳3)年に鑄造されたものであることがわかります。

『歴代宝案』に、1467(成化3)年4月2日付けの朝鮮からの贈答目録があり、そこに鐘の記述があることから、朝鮮から琉球へ贈られたものと考えられます。

1907(明治40)年に当時の古社寺保存法で国宝指定されていましたが、沖縄戦でその大半が失われ、この焼けただれた竜頭のみとなってしまいました。

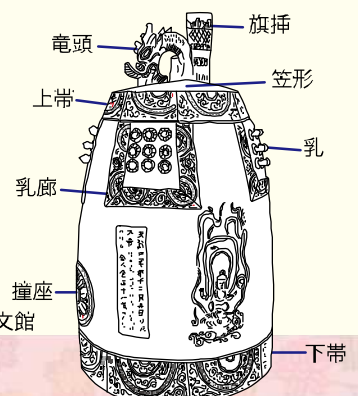
琉球国の海外交流を考える上で重要であるとともに、沖縄戦で文化財が失われたことを示す貴重な資料です。



【朝鮮梵鐘銘 [拓本]沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

(写真提供:①沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館)

【参考文献】
坪井良平、『日本の梵鐘』。2019年。吉川弘文館





これも蔡温によって
建てられたんだね。

270年前に、首里から名護へ王都を移そうという動きがあったことを示しているよ。それに対して蔡温が「丁都は首里が良い」という考えを示していることがわかるね。



さん ぶ りゅう みやく ひ
三府龍脈碑

1基



ひんぷんがじゅまるの由来となった蔡温の石碑



■三府龍脈碑(表・一部)



■碑文(拓本・表) 漢文で記されている



■日輪と瑞雲(拓本・表・上部拡大)

三府龍脈碑は、1750(乾隆15)年に国相蔡温によって、現在「名護のひんぷんガジュマル」がある場所の近くに建てられた石碑です。

碑文の内容は、都を首里から名護へ移す案と、羽地運河の開発構想に対して風水学の観点から批判したものです。すなわち、三府(国頭・中頭・島尻)は、首里を中心とした龍脈であり、遷都や運河の開発は龍脈が分断され国土の活力を損なうと強く主張しています。

石碑は沖縄戦で破損し、上半分だけが残り、現在は名護博物館に保管されています。琉球王府の地方統治の様子を知る資料の一つとして極めて貴重なものです。



■碑文(拓本・裏)
「法司官 蔡温」の文字が見える



■三府龍脈碑(裏・拡大図)
「法司官 蔡温」の文字が見える

伊江家資料

11点 附書簡14点 書跡12点 絵画1点 漆器3点



尚育下の書跡などの
文書類だけではなく、
漆器などもあるんだね。



伊江家が所蔵していた工芸
品も指定されているんだ。
国下の血を受けつぐ名家
の暮らしぶりがわかる資
料群だね。



上級士族の生活を示す資料群



天師符録



尚育王書五言対句「風舞文明世」



朱漆楼閣山水人物堆錦中央卓



天板

一部として国の重要文化財に指定されました。

現在の「伊江家資料」の雑記類には、「藩王御請江戸上り記録」、「天師符録」があります。「藩王御請江戸上り記録」からは、琉球国末期の江戸立ちの様子が分かります。「天師符録」は、中国道教の二大宗派の一つである、正一教の教団教主の直筆のお札で、大変にありがたいものとされました。

また、書跡類には、尚育王書五言対句「風舞文明世」、宜湾朝保和歌「立春」(短冊)など、王国末期の著名人の直筆の漢詩や和歌が含まれています。「紙本着色楽童子の図」、「黒漆雲龍螺鈿盆」、「黒漆菊牡丹螺鈿沈金中央卓」などの絵画や漆器などの美術工芸品も優れた作品です。

これらは、琉球国時代の首里士族の生活の様子を知る上で重要な資料群です。

(写真提供: 那覇市歴史博物館)

伊江家(伊江御殿家)は、第二尚氏四代尚清王の第七王子尚宗賢(伊江朝義: 1538~1586年)を初代とする首里の名家です。

この資料は、もとは文書・記録類の辞令書、家譜、家譜関連文書、書簡、口上覚・言上写、生子証文等122点と、書跡や絵画・工芸品などの附32点からなる資料群でしたが、2019(令和元)年7月、文書・記録類のうち、特に重要なもの113点が「伊江御殿家関係資料」の



久米島の
名家に伝わる
資料なんだね。

子孫の方々が大事に保管して
いたんだね。上江洲家
住宅でも有名で、久米島を
代表する名家だよ。

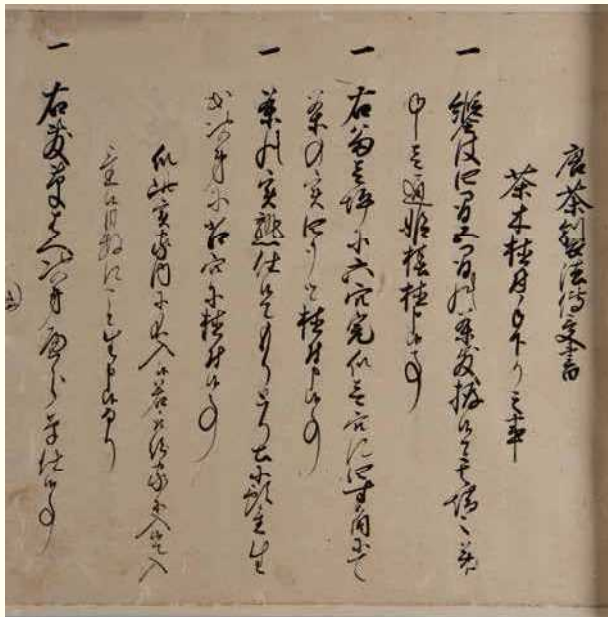


う え ず け し り ょう
上江洲家資料

1790点 書跡42点 絵画14点 工芸品109点 近世・近代史料1625点



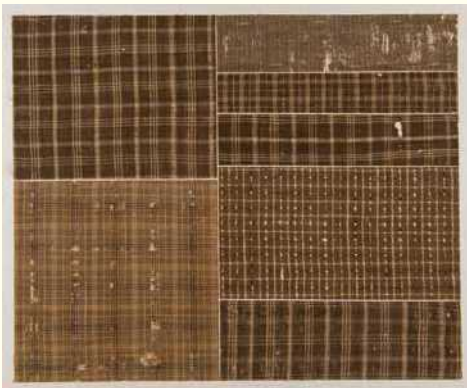
久米島の歴史を伝える貴重な資料類



唐茶製法伝受書



指南広義



久米島紬裂地帖(折本)



紙本淡彩・上江洲家御墓図

上江洲家は、久米島の具志川城主具志川按司の子孫と伝えられ、代々地頭代(ジトゥデー)を勤めた家柄です。この家に伝来する上江洲家資料は、書跡、絵画、工芸品及び近世・近代の文書群から構成されています。近世史料については、上江洲家の「美濟姓家譜」をはじめ、仕明地、農法、案文集、易占、製茶、漢詩集、和歌集、医療などいろいろな分野の文書が数多く

残されています。

この資料は、久米島の地頭代(ジトゥデー)の実態を把握する上で重要なものです。また、上江洲家の経営の様子、土地所有関係、一家の財産の形成過程や首里・那覇・久米村などの中央の士族等との文化的交流などを理解する上においても、貴重な資料群となっています。



先人から伝えられた貴重な文化財を次の世代に伝えていくことが、文化財保護の重要な使命です。そうした中、1945(昭和20)年の沖縄戦で多くの人命と共に貴重な文化財が失われた沖縄県では、破壊された文化財の復元が、戦後75年を経過した今日においても文化財保護の重要な役割となっています。文化財の復元は形だけではなく、材料や復元方法など、オリジナルに近づけるために、技術者や歴史学者など多くの専門家が集まり課題を一つずつ解決していく気の遠くなる作業です。こうしたモノの復元以外に、沖縄県では30年以上の歳月をかけて、失われた歴史の復元を行っています。それが歴代宝案編集事業です。

1458(天順2)年に鑄造された「万国津梁の鐘」で知られる「旧首里城正殿鐘」は、国際舞台へと登場した交易国家・琉球の気概を示す鐘として広く知られています。鐘には「琉球国は南海の良き地にあり、朝鮮の秀でたものを集め、中国とはほお骨と下あごのように、日本とは唇と歯のように親密な関係にあって、この二つの間に湧き出た蓬萊島である。船をもって万国の架け橋となり、珍しい宝は(国の)いたるところに満ちている」と刻まれ、交易を通じて繁栄する当時の琉球の姿が高らかに謳われています。琉球は隣接する国々との関係を足がかりに、東南アジアへも船を漕ぎ出し、貿易で国を営んでいたことが分かります。このような琉球のさまざまな活動を史的に裏付けるのが『歴代宝案』なのです。

『歴代宝案』には、古くは尚巴志王代の1424(永楽22)年から尚泰王代の1867(同治6)年までの444年間にわたる漢文で書かれた膨大な外交文書(現存は約4320件)が収録されています。その内容は、琉球側から送った文書と中国や朝鮮、東南アジア等の諸外国から送られた文書の写しが整理・編集されたものとなっています。これほど長期にわたる一国の外交文書がまとまった形で残っているのは世界的にも稀であり、『歴代宝案』は東アジア世界の交流を語る第一級の外交史料といえます。

琉球の活発な海外交易は、現在の那覇市の一角に当たる「浮島」と呼ばれた地域に形成された久米村と、そこに居留した人びとによって支えられていました。久米村は、中国福建省より渡来した「閩人三十六姓」を中心に、14世紀後半に形作られました。久米村の人々は海外交易における通訳、遠洋を航行するための大型船の航海技術をもって琉球の外交・交易の最前線を担っていました。さらに、中国など諸外国とやりとりする漢文文書の作成、解読も任務でした。『歴代宝案』は彼らが控えとして残した外交文書の写しで首里城と久米村に一部ずつ保管されていました。

1879(明治12)年に沖縄県が設置されると、首里城に保管されていた『歴代宝案』(王府保管本)は、他の公文書類とともに東京の内務省に移管され、1923(大正12)年の関東大震災で焼失したといわれています。一方、久米村では明治政府に『歴代宝案』が接収されるのを恐

れて、久米村保管本の存在を秘密にしていました。1931(昭和6)年に久米村の旧家で『歴代宝案』が「発見」され、旧沖縄県立図書館に移管されました。移管に際して、久米村は県立図書館に副本の作成と公開を条件としました。この条件により原本の保存と研究への活用のため、漢学者の桑江克英の主導で副本が作成されます。この副本は、現存する主要な写本の元となっています。この旧沖縄県立図書館写本以外にも、美術史家で人間国宝にもなった鎌倉芳太郎による原本の写真版「鎌倉芳太郎影印本」、台北帝国大学の助教授だった小葉田淳が久場政盛らに依託して旧沖縄県立図書館の副本から作成した「台湾大学蔵写本」が残されています。

多くの人々の努力によって沖縄県立図書館に収められ、日の目を見た『歴代宝案』でしたが、沖縄戦により原本も副本も疎開先であった国頭郡羽地村源河の山中で散逸してしまいました。戦後、副本の99巻が回収されたのみで、原本は失われたままです。

歴代宝案編集事業は、アジア世界の交流、琉球の対外関係を解明する上で第一級の史料を復元するプロジェクトなのです。沖縄県教育委員会は、1989(平成元)年から、現存する影印本や筆写本等をもとに復元し、広く県民に普及することを目的に事業を開始しました。編集にあたっては、誤字・脱字・虫損等による欠落部分を補うため、関連資料を収集して照合・検討することを念頭におき、当初から国内外の琉球関係史料を収集して編集に役立てています。特に北京の中国第一歴史檔案館や台北の国立故宮博物院、中央研究院とは、学術交流や史料調査を行い、関連資料の発掘、収集を進めています。この事業は『歴代宝案』の復元だけでなく、国や地域をこえた学術的な交流にもつながっているのです。



復元された『歴代宝案』(校訂本・左と訳注本・右)

【参考文献】

沖縄県教育委員会、2018年、『新訂 歴代宝案の栞』、沖縄県教育委員会